豊太郎はなぜ手記を書いたのか、また誰に書いたのか。

　豊太郎は、苦しい思いをしている。この苦しい思いは、思い出せば思い出すほど、限りなく昔を懐かしむ思いを呼び起こし、ますます心を苦しめる。しかし、豊太郎はその概略を書いた。そこで、私はなぜ苦しい過去の事を苦しい思いをしてまで書いたのか、また、誰に書いたのか知りたいと思い、テーマを『豊太郎はなぜ手記を書いたのか、また誰に書いたのか。』にした。
豊太郎の人物像をふまえて、性格の移り変わりをドイツに行く前と行った後の大きく二つに分けて書いていこうと思う。このレポートでは、豊太郎は子供の将来のためにエリスの子供とエリスの母に書いたということを伝えたい。

　豊太郎が書いた手記の内容は「生い立ちから恋愛の悲劇的結末」と私はとらえる。これは、豊太郎のあまりに深く刻み込まれた苦しい思いを表している。なぜなら、豊太郎は苦しい思いを消し去りたいと思って書いたからだ。このことから、豊太郎は心を苦しめるような“苦しい過去”を持っていると分かる。“苦しい過去”とは、ドイツに行く前の育ち方だ。

豊太郎はドイツに行く前と現在では、性格が変わっている。その背景は手記から読み取ることが出来る。
豊太郎は幼いころから厳しい家庭教育を受けていて賢かった。受動的・機械的人間。つまり、他人のしいたレールをただたどるだけで個性的でなく型どおりだった。これらは、親や上官が生きた辞書にしようと育てた結果だ。豊太郎は親などによって形付けられた。生きた辞書とは、人間らしくない完璧な人間だと私はとらえる。豊太郎も実際、自分はどんな困難にも耐えられる強い意志を持っていて、将来有望で、度胸もあるし、優れている完璧な人間だと思っていた。

しかし、その家庭教育を離れて、ドイツに行って自由になると、本当は、勇気もないし、臆病だし、弱い意志を持っていると気づいた。実は、本当は人間らしいのだ。私は、豊太郎はもし、幼いころそんな育て方をされてなかったら、現在、こんな苦しい思いをせずに済んだんじゃないかと思う。なぜなら、もし幼いころそんな育て方をされてなかったら、親などから辞書のように育てられることはなかったし、形付けられていなかったと思う。そして、受動的・機械的な人間ではなくもっと人間らしく育っていただろう。このように、最初から人間らしく育っていたら、ドイツに行く前のような性格にはならなかったと思うし、“過去”に苦しめられることはなかったと思うからだ。確かに、自由に育った人も苦しい思いをするときもあるけど、自由に生きてきたのだから自分の責任だと思う。
豊太郎は、そう育てられた結果、“苦い過去”を持った。

　豊太郎は、エリスの子供とエリスの母へこの手記を書いたんだと思う。なぜ書いたのか。それは、自分の子供に、自分みたいな生き方をしてほしくないし、子供を育てるエリスの母に、自分がされた育て方をしてほしくないと思ったからだと思う。将来、自分の子供に、自分のようになってほしくなかったのだと思う。豊太郎と同じような厳しい家庭教育を受けて生きた辞書のように完璧な人間に形付けられたら、将来豊太郎のように“過去”に苦しむだろう。豊太郎は、子供に苦しい思いをしてほしくなかったし、二度と同じ過ちを起こしたくないと考えたのだろうと思う。豊太郎の望む育ち方は、自分がドイツにいた時のように、縛られるものがなく自由な環境で育って生きることだと思う。